ゴミのつぶやき―横浜から（No,４２）

酷暑の夏に思う

フォーラム環境塾運営委員長
杉島　和三郎

１　はじめに

今年の夏は酷暑と云われるほど暑かったが、本シリーズ（３０）に記したように最愛の妻が天に旅立って１年が経ち、独居老人の生活にも慣れて生き抜くことができた。そんな中で種々の役職を離れたものの、地元団体やフォーラム環境塾関連の残像が多少残っており、生きる張りを与えられていると感謝している。そこで廃棄物から一寸離れるが、夏に出会った幾つかの話を述べ本稿のつぶやきとしたい。

２　今年の夏のこぼれ話

①地球終末期と思いたくなった今年の夏

四万十では史上最高の４１℃を記録して特産の鮎の姿を消し、桜島が５，０００ｍの噴煙を上げ、四国は水不足なのに裏日本はゲリラ降雨に見舞われ、地球がいよいよ破壊に近づいているのかと思いたくなったほどであった。それなのに節電の声が聞こえなくなり、「適切な温度で熱中症対策を」の警報が連発され、温暖化の話題が全く消え去ったのを不満に感じた夏であった。

鹿児島では火山灰の清掃車が出動し克灰袋をはじめて知ったが、一般ごみと異なる廃棄物清掃で担当部門のご苦労に敬意を申し上げたい。

②酷暑の中の夏祭りは年代と地域を超えた絆の輪

担ぎ手不足も言われているが、今年も町に神輿が繰り出して賑やかだった。最後は恒例の地元小学校夏祭りで、学区内の各自治会が競ってブースを出店し、校庭に櫓を組んで踊りの輪を広げ、単位自治会より規模が大きいイベントである。筆者も運営委員長を務めたことがあるが、ジジババ・パパママ・教員・児童が年代や地域を超えて交流している姿を見ていると、希薄の都会の絆を結ぶ良い機会となっており嬉しい限りだ。その原因は他の団体の活動と比較して、PTA の子を思う関心が高く、小学校が求心力となっているからと改めて感じた夏であった。

③玉音放送を聞く会で平和を考える

毎年８月１５日の終戦記念日に終戦勅語玉音放送を聞く会に今年も出席した。「耐えがたきを耐え・・・」の勅語は雑音放送と云われ、大人から終戦を知らされてホッとするやら、これからどうなるか心配したことなどの思い出話に続き、平和と戦争反対が結

論となった。しかし戦争はエジプト内乱や竹島・尖閣問題を見る限り外交のみでは解決しにくいとの話になり、アリやサルなどの縄張り争い本能の延長線上に領土問題があり、人間には宗教問題もあるのではとなった。

英・仏・独などの各国が植民地を維持する国費から、各国を独立させた例も話題となり熱い議論が続いたが、結論が出ないままお開きになった夏であった。

④汗をかいた執筆投稿

最近は投稿依頼を辞退しているが、本メルマガだけは事務局長のご依頼で４２回にも達した。そんな折、「効率的な設備投資を考える」の特集号の一齣、「失敗しない焼却炉選び」のテーマで、製作メーカーに偏らない第三者的な観点でとのご依頼で止む無くお引受した。確かにメーカーの技術説明の巧みさで選定したものの、焼却炉性能が発揮できず短命で運転不能になる例をいくつも見てきたが、その原因の一つは購入者側にも技術評価できるエンジニアが少なかったことも事実である。

しかし本来のテーマある「失敗しない焼却炉選び」は、形式的に各社の特長もあり触れにくい部分があることをお詫びし、施設の立地・競合社状況・排出者のニーズ・一般廃棄物のと異なる性状確定の困難さなどのインプット条件の設定をはじめ、複雑な各種法律の理解と準拠・ＣＳＲ・情報公開・住民理解・保守メンテナンスの寿命に及ぼす関連性・人材育成などが、投資経営者に重要な点であることを述べたのであった。

果たして完成した特集号を拝見して他の投稿者は読み応えがあるものであるのに対し、筆者の投稿は恥ずかしくて汗が噴き出した夏であった。

⑤未知への遭遇フェースブックとの出会い

友人から薦められてタブレットを春に買ったが、取扱説明書は薄ペラで用語も分からないことが多い。幸い購入店の若いお嬢さんから個人レッスンを丁寧にして頂き、ＰＣと同期できて便利さを知った。もっともレクチャーは１時間以内と決め後は自宅で操作を繰り返し活用して覚えることにしている。

加えて友人からフェースブック（ＦＢ）を薦められたが、初心者でヨチヨチ歩きしている現在である。「お友達」のリクエストがしばしばくるが、不安が先で親しい友人のみに限定しているものの、友人によっては「何処にいて何していて楽しかった」などを写真付きで日に何通も送ってくる。個人情報を曝け出している感もありＦＢ依存症と名付けなる程の未踏分野に入り込んだ夏であった。

３　おわりに

酷暑の夏を過ごした一齣を述べたが、幸い亡き妻の一周忌も無事終わりホッとしているのが偽らない心境である。一部の友人から「妻の偲ぶ会」の計画を頂戴したが、固く辞退したところ「和三郎を励ます会」と共催すると言われてお受けし、持つべきものは友であると実感した夏であった。

お蔭様で妻の残務整理を一応終わり、残された余生をいかに過ごすかを考えているが、

ある友人から「余生などの考えは捨てろ」と戒められ、「余力を社会のためになることに挑戦しろ」と薦められた。しかし「老害を撒き散らさない」ことに自戒しながら、残された人生を過ごしたいと思った夏であった。

ゴミのつぶやき―横浜から　**バックナンバーはこちらから**